

第五回 齋藤茂吉短歌文学賞

齋藤 史 『秋天瑠璃』

不識書院

正賞・茂吉自筆色紙の織画
副賞・賞金百万円

選考委員

委員長 清水房雄

委員 桶谷秀昭

佐佐木幸綱

篠 弘

森岡貞香

(五十音順)

齋藤 史『秋天瑠璃』（自選十首）

人を瞬^{またた}かすほどの歌なく秋の来て瘦^{われも}吾亦紅^{こう} それでも咲くか

するすると夕闇くだり見て居れば他人の老いはなめらかに来る

老いたりとして女は女 夏すだれ そよろと風のごとく訪ひませ

疲労つもりて引出ししヘルペスなりといふ八十年生きれば そりやああなた

老いてなほ艶^{えん}とよぶべきものありや 花は始めも終りもよろし

夏の余白・思ひの余白おく露のいよよ増しゆく残り朝顔

境涯詠などとよぶ日常の埃^{ほこり}歌 燃せばしたたかなる不燃物

秋天瑠璃の空せばまりてたちまちに霧寄せて来ぬ越後境より

友等の刑死われの老死の間埋^{あひ}めてあはれ幾春の花散りにけり

思ひ草繁きが中の忘れ草 いづれむかしと呼ばれゆくべし



第5回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

齋藤 史(さいとう ふみ)

歌人。明治42年2月14日、東京生まれ。福岡県立小倉高女卒。父は元陸軍少将で「心の花」歌人の齋藤澗。

大正末年頃より作歌。昭和6年、前川佐美雄等と歌誌発刊。時代の歌を探り、モダニズム、新風などと呼ばれる。

第1歌集「魚歌」（昭15刊）以後、当時の「女流文学者会」委員。「短歌人」創刊同人。

戦中疎開、長野県に居住。昭和37年より歌誌「原型」を主宰、現在に至る。

日本歌人クラブ第1回推薦歌集「うたのゆくへ」（昭28刊）第11回返空賞「ひたくれなみ」（昭51刊）第37回読売文学賞「涉りかゆかむ」（昭60刊）第3回若山牧水賞（平1年）

他に「齋藤史全歌集」、文庫本「齋藤史歌集」随筆集、入門書等。

日本芸術院会員

受賞のことば

齋藤 史

このたびは、大歌人齋藤茂吉先生の御名の短歌文学賞をいただくことになりました。身におまることごとくでございます。このような思いがけない幸せに出会ったものだろうかと思っております。八十五歳の今日まで短歌と仲よくして参りましただけの人間でございます。

御存知の方はすくなからうかと思えますが、昭和三年、熊本に居りました頃、阿蘇山の「安居会」に、茂吉先生の御許しを得て、末席に加えていただきました。私、最年少者でございます。しかし、その後は、手探りのような歩き方を致しまして、長い年月が経ちました。

今回のことは、それゆえに、私にとりましては、何とも言いつくせないよろこびであり、身の引き締まる思いで居ります。

すでにこの年ではございますが、御はげましをいただき、歩けるだけは歩いてゆきたく念願して居ります。

はるかかな齋藤茂吉先生、ありがとうございました。

選考委員の皆様、御関係の皆様方、言葉足らずでございますが、あつく御礼を申し上げます。

まことの花

清水房雄

老の歌は、今の世いくらでもある。が、老に屈んぜず潮垂れざるをとなると、事は容易でない。

もともと豊かな花の人、齋藤さんだが、老来、その花の輝きは圧倒的である。

「花はありて年寄と見ゆる公案くはしく習ふべしただ老木に花の咲かんがごとし」「まことの花の残りたる為手にはいかなる若き為手なりとも勝つ事はあるまじきなり」（風姿花伝）との、古人の言や佳とすべきか。

そして今、この人の花には、言いようも無い凄味がただよう。例えば巻頭の一首

循環機能今日はいささか活潑にて
老女・老鷄水しきり飲む

の如き、嘗て斯うした老の歌は、絶えて無かった。

丈高い韻律

桶谷秀昭

第一歌集『魚歌』の中に忘れがたい絶唱がある。

たふれたるけもの骨の朽ちる夜も
呼吸づまるばかり花散りつづく
それから五十五年たった今日、
春嵐一日を荒れて鎮まれど風にねぐ
らのありとも思へぬ

と歌ふ。これが第十歌集『秋天瑠璃』の世界である。末は泥土か夜明けか知らぬと歌った昭和戦乱激動の時代を生き抜き、二十世紀のをはりに、残生の覚悟を陰翳ふかく歌ひ、日々を回想から得た自覚の

うちに生きるこの歌人の、丈高い韻律が心を打った。この人あるがゆゑに、日本の歌はほろびぬとさへ思はれた。

短歌史上の事件として

佐佐木幸綱

齋藤史氏の第十歌集『秋天瑠璃』のなかに、「境涯詠などとよぶ日常の埃歌燃せばしたたかなる不燃物」という作があつて、この歌人が、第一歌集『魚歌』以来、意志的・意識的に境涯詠を拒否してきたことの短歌史的な意味をあらためて考えさせられたのであつた。

暮れてのち炎やうやく遊ぶなり白昼
あからさまを嫌ひて野火は
眺めよき屋上に来てここより先は
空へ翔ぶもの地へ墮ちるもの

境涯詠とは次元のちがう、こういう老いの歌の出現は短歌史上の一つの事件であり、今回の齋藤茂吉賞の授賞作として『秋天瑠璃』は、まことにふさわしいものだと考える。

美への憧れ

篠弘

齋藤史さんの『秋天瑠璃』の受賞は、まさに委員の一致するところであつた。とりわけ高齢の女性の世界が、ここであらたに切り拓かれた。のびやかな生の存在が詠みつくされて、近代以来の短歌になかった域がうかがわれる。これが大きな収穫である。

わたしは、そうした老境の歌にまじつて、作者が培ってきたロマンティズムが、いぜんとしてフレッシュな点に着目したい。

の如き、嘗て斯うした老の歌は、絶えて無かった。

丈高い韻律

桶谷秀昭

第一歌集『魚歌』の中に忘れがたい絶唱がある。

たふれたるけもの骨の朽ちる夜も
呼吸づまるばかり花散りつづく
それから五十五年たった今日、
春嵐一日を荒れて鎮まれど風にねぐ
らのありとも思へぬ

と歌ふ。これが第十歌集『秋天瑠璃』の世界である。末は泥土か夜明けか知らぬと歌った昭和戦乱激動の時代を生き抜き、二十世紀のをはりに、残生の覚悟を陰翳ふかく歌ひ、日々を回想から得た自覚の

ビニールの傘を一つの円光として
いでてゆく氷雨の中を
雲切れて月光洩るるかりそめの明る
きにして雪野は匂ふ
ひらかれし鮭の片身に雪降りりあな
うつくしき埋葬のさま

冬のきびしい長野の風土にあつて、作者の眼差しは輝いている。生きる確かさを、みずみずしく詠む視角は鮮烈で、そして鋭い。この強靱な透視力には、美への憧れがひそむ。

艶のある歌

森岡貞香

芹の粥ぎんなんの粥みなよろし
さらさらと薄雪の正月
老いてなほ艶とよぶべきものありや
花は始めも終りもよろし

老いの日日をうたつてこんなに美しい調べがあつたらうか。女人のうたう歌の

艶を見せている歌でもある。

『秋天瑠璃』は齋藤史さんの第十歌集である。華麗な歌風はここに至つて、老いを正面に見据えながらも、その歌の上での見え方はさらに自在な美しさを増している。かつて歌集『ひたくれなる』でうたった「つゆしぐれ信濃は秋の姥捨のわれを置きさり過ぎしものたち」の質、感性は『秋天瑠璃』ではさらに強靱な言葉の世界へと展開しているように思われる。

経験の重みを老いの年齢のうゑに重ねて深く大きいこの歌集は、齋藤茂吉文学賞の名を冠してより広く一般に読まれてほしいことである。茂吉賞は、この歌集を得て、いよいよ大きいものになつたとおもう。

これまでの受賞者

第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房

第二回 本林 勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社

第三回 塚本 邦雄 『黄金律』 花曜社

第四回 前 登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇一七〇

山形市松波二丁目八十一 山形県企画調整部文化振興課内

TEL 〇二三六―三〇―二一九七